

●鈴木豊人 ci

ドイツの風と太陽で、10年は磨き込まないと、この音にならない。

しかし、この奥行きある語り口こそは、のちに重ねた年月の深味だ。

長くドイツの楽団で首席を務め、帰国後もサイトウ・キネンや紀尾井ベカ(宝塚)などの楽団で活躍する奏者の一夜。千金の音で綴るシューターの「ソナタ」は熟した表現。円滑な技術に裏打ちされた抑制の美。明瞭な輪郭と陰影には品格も漂う。稀少なセタツチョーリの「ソナタ」は舌を巻く腕の牙え。それがワザの見世物にならないのは音楽性の勝利だ。

ライネッケの「序奏とアレグロ・アバッショナート」は小品でも演奏の構えが大きい。肉太の筆致。そして

ブラームスの「ソナタ第2番」。端正の文字を、そのまま音にした姿の厳しさと尊さ。内部の燃焼度が高い。

質朴でいて独自の艶がある語り口は、ブラームスの孤高の肖像を描ききった。鍵盤の底まで届く音で共演の右近恭子のピアノも見事。(10月27日・宝塚ベガホール)